〈記事広告〉

「医療、工学、看護が共に創る未来へ」―。超高齢社会に突入したわが国にあって、ナーシングのイノベーションと産業化を目指した「レジリエント健康長寿社会の実現を先導するグローバルエコシステム形成拠点」の活動「プロジェクトCHANGE」が、川崎市にあるナノ医療イノベーションセンター（iCONM）を中核拠点として始まった。同センターの一木隆範研究統括をプロジェクトリーダーに、さまざまな大学・企業からの参画者のほか、現役の医師や看護師らの専門人材が結集し、誰もが身近な人を看護できる道具や仕組みの創出を目指す。見据えるのは健康長寿につながるケアの質向上とケア人材の労働負担軽減だ。

医工看共創で変える
超高齢社会の看護ケア ①

社会実装へ まず共感

誰もが身近にいる人を看護できる社会を目指して

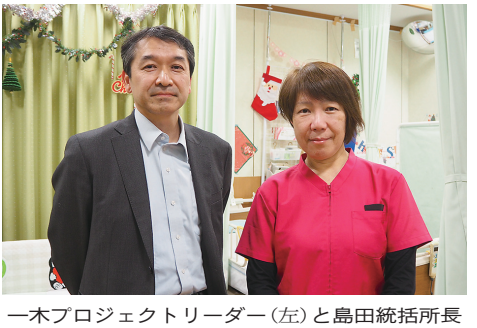
京急大師線大師橋駅から歩くこと5分。トラックの行き交う産業道路の喧噪から離れた住宅街の一角に「川崎大師訪問看護ステーション・大師分室」は所在する※。訪問看護ステーションはその名の通り、通院できない患者の自宅や施設を看護師らが訪れ、必要な看護支援を行うことを役割とする。

しかし、同ステーションの島田珠美統括所長は、このように語る。「病院と異なり在宅医療では看護師が24時間患者に寄り添うことができない。そのため、家族の支援をすることも私たちの役割」。

基本的に訪問看護師は医療機関と異なる環境下でケア業務を行わなければならない。そしてその内容は広範だ。医師の指示に基づいた医療行為に加えて、口腔ケアや排泄ケア、さらには家族の相談・支援にも応じる。そのため、「自宅で誰でも手軽に扱えるケア製品へのニーズは大きい」と話す。

加えて人手不足の波は訪問看護も例外ではない。いかに業務の効率性を高めるかも問われている。だが、看護の現場に対し、これまで理工学の光は十分に当たっていたとは言いがたい。

こうした現場が抱える課題に対し、理工学の力で応えようとするのがプロジェクトCHANGEの主眼だ。一木リーダーは「医工連携はこれまでもあったが、看護との連携はなかった」と意義を強調。現場が直面する「大変さの度合いを少しでも工学の力で下げたい」との意気込みをみせる。イノベーションを実現し、その社会実装を図るためのポイントとして、「現場で何が求められているかを、将来のユーザーとなる市民や看護師と一緒に共感していく」ことを挙げ、“現場主義”を貫く姿勢を示す。超高齢社会は日本だけの課題でなく、今後世界中のトレンドとして広がっていくことから、成果は「世界市場で必要な存在になる」との確信も抱く。



一木プロジェクトリーダー（左）と島田統括所長

CHANGE
Center of Healthy longevity And Nursing innovation with Global Ecosystem

3/27にキックオフシンポジウム開催！ 詳細は以下のQRコードから

在宅ケアの質を高める

島田所長が率いる訪問看護ステーションが立地する川崎市も当然、CHANGEの舞台。在宅医療における次世代のナーシングシステムを生み出すためのキーパーソンの一人でもある。

「在宅ケアの現場では、看護師の精神的・身体的負担が重い。理工学の力でぜひ解決してほしい」。こんな期待を島田所長はプロジェクトCHANGEに寄せる。これまでになかった医工看共創プロジェクトが幕を開けた。

プロジェクトCHANGEは文部科学省／日本科学技術振興機構（JST）が掲げる「令和4年度共創の場形成支援プログラム」で採択された10年間にわたる息の長い超巨大プロジェクトだ。「みまもり技術でいつでも診断」「長寿メドテックで安全・安心な在宅医療」「老化制御で健康寿命延伸」「長寿イノベーションを加速する社会基盤」という4つの目標に向けて、一木リーダーの下、企業出身の副プロジェクトリーダー2人と最先端の科学領域において大学で活躍する研究開発課題リーダー5人が各参画機関とともに取り組む。CHANGEの挑戦を、3回に分けて紹介する。

入浴を補助する昇降式ベッド付きの浴槽

※現在、川崎大師駅前にある本拠地が改修工事中のため大師橋駅近くに仮設。